

令和3年度第1回社会教育委員会議 議事録

日 時 令和3年6月30日(水) 10時～12時

会 場 エル・おおさか 南101

出席者 大迫委員、大平委員、大矢根委員、岡田委員、小山委員、明貝委員、長三委員、濱元委員、柘井委員、山本委員

議 事 (1) 議長・副議長の選出について
(2) 令和3年度子ども読書活動推進事業計画について
(3) 様々な居場所における子どもの読書活動習慣形成事業(企画運営委員会)について
(4) 教育コミュニティづくりにおける地域人材の養成について

その他 (1) 近畿地区社会教育研究大会(大阪大会)について
(2) 大阪府視覚障がい者等の読書環境の整備の推進に関する計画(読書バリアフリー計画)について

<意見・質疑要旨>

◆議事(1)議長・副議長の選出について

「概要」

大阪府社会教育委員会議規則第4条の規定により、議長及び副議長は委員の互選によって選出することを事務局から説明。議長の選出について、委員からの推薦がなかったため、事務局から岡田委員を推薦し、承認された。

副議長については、岡田委員から大平委員の推薦があり、承認された。

◆議事(2)令和3年度子ども読書活動推進事業計画について

「概要」

- 委員 高校生の世代を含むヤングアダルトといわれる層に対して、まずは図書館を魅力化すること。そして、学校の図書室と公立図書館とが連携し、地域の図書館での身近な読書活動へと広げていきたい。ただ、競合の相手はスマホ。計画の中に電子書籍のことがあり、良いアイデアだと思っている。
- 委員 読書しない理由に「時間がない」、「読みたい本がない」、「読むのが面倒」ということがあがっている。高校生、中学生ぐらいの世代では、スマホでライトノベルなどを読んでいると思うが、そこから書籍へ繋げていくところが課題。
- 委員 普段、私がボランティアセンターを担当していて、ボランティアの高齢化や、担い手不足といったことと同じように苦勞を感じているのは、情報を若者向けにどう発信していくかということ。中高生に対してはSNSなどが有効になってくると思うが、何をすれば知る機会をより作れるかと考えると、現在はLINEが一番多く、Twitter、Instagram、Tiktok、Facebookなどの順で活用がされてるという実態がある。一つのヒントとして、そのようなTwitter等をうまく活用し、重点的に発信するようなことをすれば、もしかしたら届くのではないか。
- 委員 我々はFacebookから入ったが、もうFacebookは大学生もあまり使わないと聞く。Twitter、Instagram、更に若い世代では言われたとおりTiktokも多い。

- 委員 我々も Facebook が主流だが、やはり Facebook はあまり使っていないのではないかと
いうことも聞くので、検討しなければならない。
- 委員 学校の中でできる読書活動、読書推進の活動として、概要の重点施策 1 にあるビブリ
オバトルというのはすごく良い取り組み。私も大学一年生の授業の中で自分が好きな本
を 5 分間で紹介、発表し合い、読みたくなった本を決めるという活動をやっている。
自分が読みたい本についてのスピーチ能力も高められるし、他の発表を聞いて読書の
幅が広がる、興味が広がるといった、とても良い活動だと思っている。大阪府でも大
会があるそうだが、そういった読書推進の活動事例として、もっと学校で紹介されて
もよいのではないか。また、学校地域が協同でできる活動としては、例えば地域の方
に、子どもの頃に読んだおすすめの本を紹介する動画などをスマホで撮って学校に送
ってもらい、子どもたちに伝えるといった、おすすめしたい本で地域と子どもを繋げ
るというような取り組みも良いのではないか。そういった学校でできる形をもっと発信
されるとよいのではないか。
- 委員 ビブリオバトルについては、本学でも教員と学生と一緒に実施している。また、最
近、出始めたブックログという無料のサイトでは、学校単位でライブラリーを設け、そ
こに学生が感想をアップでき、それを共有して読むこともできる。これも学校単位と
して取り組めるものの一つ。学生の入り口として、スマホからどう広げていくのかと
いうのは考えていくべきだと思う。
- 委員 当市での調査で、小学 5 年生のときに月 5 冊以上本を読んでいた子どもは、中学 1 年
生時に全く本を読んでいない割合が少なく 17.4%で、中学生になってからも八割以上
の子どもが本を読んでいるということがわかった。小さい頃からの読書習慣を身につ
けるため、幼少期から家庭に本がある生活というのが大事だと呼びかけている。図書
館の日々の活動の中で、中高生に図書館に来館してもらうためには、中学生が過ごし
やすい場が図書館にあることが大事だと感じているところ。電子書籍については、一
定の利用手続きが必要なこと、検索の仕方など、利用するまでにもハードルがあるの
で、いかにその辺りのハードルを下げっていくか、入り口として使い勝手の工夫も必要
だと思う。
- 委員 子どもが 3 人おり、ちょうど高 3 と高 1 にいて、図書館に行かない年代。行かない理
由として、クラブと勉強の両立が忙しく、行く時間がないということがある。一番下
の娘は本が大好きで、以前は週に 1 回ぐらい図書館に通い、年間 100 冊ぐらい読んで
いたが、中学 2 年生ぐらいから時間がなくなって行かなくなった。近くに図書館があ
るので、「なんで行かへんの。」と聞くと、「行く時間がない」、「世代的に読みた
い本が見つからない」と言って、足が遠のいてしまった。また、資料の理由の中には
ないが、読書が嫌いなわけではなくて、特性としてできないということもある。そう
いう子に対して読書ができる工夫があったら、親としては嬉しい。電子書籍に関して
は、子どもたちはよくスマホで漫画を読んだりしているが、親として一番心配なのは
視力の低下。ちょうどこの間、高校生 2 人は視力検査をしてきて、2 人とも引っかか
ってしまった。視力が著しく落ちた。電子書籍は便利だが、活字の本も読んでもら
いたいということも、親としては思っている。
- 委員 本を読む時間が減ってきたことを昔は「活字離れ」という言い方をしたが、最近、言

わなくなったのはスマホで読んでいるからということ。でも、おっしゃるような問題もある。

○委員 この読書推進計画策定に関わっていたが、単に本を読まないということではなく、読まない理由があると強く話をした。読みたくなくて読まない人もいるし、読めない人といわれる方の中には、今、言っていたように、そういった特性があって読めない方や、経済的な理由があって読めない方などもいらっしゃる。ただ読まないというような括りをせず、どうやって個々の理由にあたっていけばよいかということをして話して、様々な企画を考えていただいた。電子書籍に関して私は大賛成だが、コンテンツの問題がある。子どもたちが読まないコンテンツ、子どもたちが読めるコンテンツがあり、私も図書館に関わっている立場として電子書籍のタイトルを見させていただくと、検定本や資格の本などが多く、現状ではあまり読めない。ただ、授業をやっていると、クラシックな本を読むといったときには、そういった電子書籍よりも青空文庫の方が充実していることもあって、ただ電子というだけではなく、コンテンツのことも考えていけたらよいのではと感じる。

○委員 私も実は本を読むのが苦手なタイプだった。うちの大学で客員教授でも来ていただいているモンベルの創業者で会長の方とよく話をするが、彼は高校生のときの国語の教科書で、ハインリッヒ・ハーラーの「白い蜘蛛」という登攀記を読み、感銘を受けて登山家になった。そして、今のモンベルがある。彼は「僕は本をほとんど読まないんだ」と言う。数を読むというのも大切だが、1冊との出会い、良い本に出会える機会があるというのが非常に重要だと思う。そういう意味では、その子に合った本をうまくマッチングでき、子どもが関心のある本に出合えば、そこから世界が広がっていく可能性もある。本は世界を開けてくれる。著作権が切れたら、本はただで読むこともできる。

○委員 先ほどの指導もあるが、幼少期の読み聞かせの経験が、その後の読書体験を広げるといえるのはそのとおりだと思う。角野栄子さんという絵本作家の方がいらっしゃるが、その方の本の中でも、子どもが文字を読めるようになってきた時期に集中的に親が読み聞かせをすることがとても大事だと言っていた。そのことが後に、どんどん本に親しんでいくきっかけを作るといえるようなことを書いておられ、自分自身も実践し、うちの子どもたちもすごく本好きになり、早くに読み聞かせを卒業した。保育の場や図書館等が、そういった読み聞かせの場を作ることがとても重要な課題であり大事だと思った。また、それに関連して、この絵本のひろばセットの本の貸し出し事業についても、とても良い事業だと思う。僕自身も近くのショッピングモールでこういうものが開かれ、子どもたちを連れて行って好きな本が読めたという経験がある。課題としては、この絵本の広場セットを大阪府の各地域からここまで取りに行かないと、この事業ができないということ。もう少し、地域ごとに絵本のひろばセットのようなものがあり、様々な地域で利用しやすければもっと広がるのではないかと。

○委員 小学校では、例えば国語の授業で、一つの作家さんに対し、並行読書といって同じ作家さんの本を紹介する取組みを実施している。また、市立の図書館にジャンルなどを指定し、関連した本を学校に配送してもらうようなシステムを利用したり、読書手帳といって、読んだ本の記録をつけていったりする取組みも行っている。その他にも学校司書が読み聞かせをする、あるいは図書委員会等で先生のおすすめ本を紹介すると

いった取組みも行っている。しかし、読書活動の最大のライバルはゲーム。先週、うちの学校でも調査したが、1日2時間以上ゲームする子が多くいる半面、月曜から金曜まで、全く本を読まない子が25%ぐらいいる。やはりゲームに勝つというのは非常に重要だと思う。生活指導的な観点でいうと、地域によっては小学生が子どもだけで校区を出てはいけないというところもある。そうなると、お家の方にいかに図書館へ連れて行ってもらえるかが重要。先ほどの経済的な理由という話もあったが、小学校1年生から6年生までに読む本というのは、6年間でどんどん変わっていくので、それを自宅で買うと非常に高額になる。図書館を上手く使うことは経済的にも非常に有効。また、本を返すと必ずまた借りるといったルートができてくれば、継続的に図書館が使われる。保護者になる子どもたちに図書館を知ってもらい、子どもたちが保護者になったときに、その子どもたちがもっと図書館を使うようになるとよい。学校教育の中で図書館をどのように使うか、子どもたちだけでは図書館に行けないので、お家の人に何とか連れていってもらいたいような仕組みができればよいと思う。

- 委員 中学生もなかなか本を読まない。時間がないという理由もあるが、家に帰ってから、ずっとスマホを見ていることが多いと思う。もちろんスマホで本を読むと、視力が低下するという問題はあるが、スマホを見ることを止められるかということ、なかなか難しい現状がある。また、噛めば噛むほど味が出る、心に残る本というのは、良い本だと思うが、動画やアニメと比べ、本は最初に強烈に読みたいという気持ちにはなかなかかなれない。したがって、学校教育では、ある程度、課題や宿題で読書を促したり、授業の中で取り組んだりすることはできるが、それによって簡単に読書率は変わらない印象。ただ、その中で良い本に出合わせるというようなつもりで学校でも指導を進めていけるようになればよい。学校教育でただ読書率を上げるということだけではなく、そういった取組みをどんどん取り入れていけたらよいと思う。
- 事務局 事務局として も子どもが良い本と出会うためのツールとして、SNS、Twitter、Instagram 等で発信はしているが、なかなか子どもたちに届いていない印象。おっしゃっていただいたように、発信の仕方の工夫や周知の仕方等も考えていきたい。絵本のひろばも、市町村が独自で購入できるような形として、福祉部の新子育て支援交付金を活用し、メニュー化をしている。こちらの周知等も効果も含めて、積極的に発信していき、工夫しながら進めていきたい。
- 委員 本に出会うために、様々なおすすめの本を紹介するというのは良い取組み。一方で、自分の今の気持ちにフィットする本に出会うというのが、なかなか難しい。そういった観点でも検索できる仕組みがあると良い。大阪国際児童文学振興財団のサイト「ほんナビきっず」では、思いついた言葉で子どもの本を探せるので、日頃使わせてもらっている。
- 委員 おそらく、皆さんはSNSやインターネットをよく見て、情報はたくさん持っていると思うが、そこには勝手なバイアスがかかっている、自分が見たいものしか見ないという傾向があり、情報がかえって狭まっている。先ほど言われたような今の自分の気持ちが引っ掛かりやすい方法というのを作っていったほうが良い。
- 委員 中学 高校でクラブ活動が忙しくなるということもある。しかし、運動部で忙しい子は本を読まないのかということ、必ずしもそうではない。私は高校のとき山岳部で、それ

までほとんど本を読まなかったが、山岳小説に出合ってから本を読むようになった。バレー部だったらバレー部を物語にしているようなものなど、クラブに関わったものを入り口にするような工夫をすることで、運動部系の子たちにも読書を推奨できる可能性があるのではと思っている。

◆議事(3)様々な居場所における子どもの読書活動習慣形成事業(企画運営委員会)について

〈概要〉

- 委員 貸し出し図書セットの中に、もう少し流行の漫画を増やせられないか。我々も本屋さんとの共同事業として、本屋さんの本を読む機会を増やすための「Osaka Book One Project」という事業を実施している。大阪府内の本屋さんなどで、大阪にゆかりのある本を毎年一冊決めて、その売り上げの一部を児童自立支援施設等に寄付し、何でも欲しい本を買ってくださいと言ったところ、やはり子どもたちが選ぶ本は圧倒的に漫画が多かった。本を読む機会を増やしたいというところをもう少しくむのであれば、そういった漫画などの流行りの本を増やした方が、本に対する関心は高まるのではないか。
- 事務局 漫画を貸し出しセットの中に入れることも検討したが、流行りの漫画というのがシリーズものになっていることが多く、例えば8巻だけ入れても次が読みたくなくなってしまう。熟慮した結果、入れていない状況。
- 委員 事業1で良いと思ったのは、子どもが読んだ本についてのポップや帯を作り、最終的に私達もそれを見て、楽しむことができるということ。この図書セットは、府立中央図書館でも同じ本が複本で置いてあるなど、一般府民でも見ることはできるのか。
- 事務局 現時点では府立中央図書館に全ての本があるわけではない。次年度以降、効果、成果を踏まえて、検討していく。
- 委員 もう一つ、子ども向けの図書館案内リーフレットの作成。私も働きながら子育てした。働きながら、なかなか遊びに行くところがない中で、身近な図書館には大変お世話になったが、そういえば子どもに対しての利用案内というものは、あまり見たことない。できればカラーで、ふりがななどもふって、子どもが「こんな場所なんや」と思える、子どもの居場所が一つ増えるようなリーフレットになればと期待している。
- 委員 私もフリースクールに対して本のセットの貸し出し、またポップを作成して返してもらうという活動はすごく面白いと感じる。特にフリースクールに通っている子どもの中には、本好きだがその他の活動に興味関心がわかない子どももいる。そういった子どもたちに対する手立てとして、ポップを書いて送ってもらうのはすごく良いのではないかと思った。一方、対象が絞られてはいるが、不登校の子どもというのは本との接点がほとんどなく、それを作りにくいということはすごく大きな問題だと思うし、そこに着目しているのはとても重要なこと。こうした不登校の児童生徒というのは学校の図書館にもなかなかアクセスできないし、地域の図書館に日中行くこともできなくて、いろんな本に出会っていろんなことを考えるというのは、しにくい状況にあると思う。そうしたことを考えると、例えば今後の展開として、学校で別室登校をしている子どもや、不登校傾向の子どもの居場所など、そうした子どもたちのための図書の充実といったこともあったら良いのではと思った。

○委員 オーサービジットについて、市でも取り組んでいるが、難しいと思うところは、作家さんが普段お話をすることに慣れていらっしやらないことが多いので、そこをどう工夫して子どもたちも作家さんも満足できる取組みにするかというところ。市の取組ではワークショップ形式の取組みが好評だったが、一工夫が必要。図書館のリーフレットは大変ありがたいが、活字が苦手な子どもにいかに関心を持ってもらって、わかりやすいものにするかというのはすごく難しいことなので、ぜひ工夫していただきたい。

○委員 オーサービジットのオーサーに謝金はつくのか。

○事務局 少額だがつく。事業の内容についても、先日、矯正施設の職員の方にヒアリングをしたところ、小学校でやっている内容と同じでは、子どもには合わないのではないかとのご意見をいただいたので、作家の先生と調整しながら考えていこうと考えている。

○委員 少しネガティブなことを聞くが、ポップを交換する場合、子どもが書く内容が良いものばかりではないと思う。それを排除するというのはよくないと思うが、そういったものに対してはどういう手立てを考えているのか。もう一つは矯正施設の成果指標についてのアンケートの選択肢について。これもいいことばかりではなく、例えば娯楽が本しかないで時間つぶしで読んでいるというのは、選択肢に入らないか。そういったことがわかれば、本当に本が読みたくて読んでいるのかどうかはわかってくるのではないか。その後、矯正施設を出られたときに、もっと本を読めるような環境を考える一助になればよいと思ったのでお伺いしたい。

○事務局 まず、貸し出しセットについては、委員のおっしゃるとおり、子どもたちが書いたポップや帯の中にはネガティブな部分もあると想定される。手立てとしては、一度、府に送り返してもらい、事務局で確認してから次の施設に届ける。必要最低限のフィルターとして、事務局で確認したいと考えている。また、ご意見いただいた矯正施設、児童自立支援施設の質問項目については、ぜひ時間つぶしという項目も入れさせていただきたい。それ以外のネガティブな項目というものも検討してみて、選択肢を加えたい。

◆議事(4)教育コミュニティづくりにおける地域人材の養成について

《概要》

○委員 地域で活躍してくださる方々の人材を発掘して養成していくことも、地域が抱えている課題。なかなか難しいところだが、皆様のご経験から何か良いアイデアをお願いする。

○委員 伝統的に地域の人やボランティアの方々にやってもらうことが決まっている学校は、管理職としては割とやりやすいが、新たに考えるとなると難しい。管理職として活用のアイデアが思い浮かべば、もっと積極的に人材を募集できるのではないか。ただ、去年からはコロナの影響でボランティアや地域の人を学校内に入れることが難しい状況があったので、その状況が落ち着いていかなければ、地域の人にどんどん学校に来てくださいというのは、慎重にならざるをえない状況にある。

- 委員 コーディネーターを募集するのか、ボランティアを募集するのかで議論が変わってくる。学校は自校の事情をよく知っている方をコーディネーターとして確保し、その方を通じてボランティアを探していくというのが非常にスムーズなのではないか。私がいろんな地域のコーディネーターとお話して思うことは、コーディネーターを確保する際は最終的には1本釣りだということ。その際、広報は「そんな話聞いてない」という人が出てこないよう、できるだけ広く、みんなにこういう募集をしていますよということを周知しておく。その上で、地域の方がこの人だったらという方を1本釣りするというのが一番確実。地域の方の中には、「声をかけられたらやるけど、自分から手を挙げることまではしない」という人たちが結構いる。そういった人を地域の人が見つけて、呼んでくるというのが一番確実なようだ。ボランティアの場合は、ある団体がボランティアとして活動した実績を学校、あるいは地域の中で広報すると、次はそういった団体の横並びの団体が手を上げるというようなことがある。だから、学校と地域の協働活動としては、間に入ってくれるコーディネーターをうまく探して、その方と学校とが密に話をするということが大切になってくるのではないかと。
- 委員 学校が地域を巻き込む工夫として、ぜひ、市町村の社会福祉協議会とつながっていただきたい。市町村の社会福祉協議会の中には、乳幼児さんに対して、例えば、こんにちは赤ちゃん事業といって、生まれた方に本を持っていくブックスタートの事業などを行っているところもある。地域の担い手である民生委員、福祉委員、その地域での見守り活動やサロン活動などをされている地域住民、ボランティアセンターに登録されているボランティア団体、読み聞かせ等のために実際に学校に行かされている方々などもいる。そういったところとうまく繋がって、なにか一緒に展開できれば良いのではないかと、話を聞きながら思った。ぜひ一度、地元の社会福祉協議会に相談をしていただきたい。
- 委員 今のご意見で、社会福祉協議会と繋がるというのは良い手だてだと思う。教育関係の団体、青少年関係の団体に繋がっていて、校区の福祉委員会や福祉のボランティア資源とは接点がないことがある。私が以前、教員をしていた市でも校区の福祉委員会と学校が繋がっているところでは、比較的、人材の行き来が活発であった。福祉委員会で活発に活動をされている方は、他の地域の方を巻き込む力があることもあって、人材の流通を図るという意味では良い手だと思った。
- 委員 私が今、感じているのは、勉強ができない子ども、勉強ができない人の気持ちになって考えると、図書館に行かない理由は面白くないからだと思う。時間がない、クラブがあるということが行かない理由になるのは、逆にクラブが面白く、本が面白くないからではないか。大人になって「ボランティアしたくない」、「俺時間ないねん」という人でも、草野球を一生懸命やっている人はいる。草野球は楽しいが、学校に来てボランティアをする面白さが無い。ただ、そこへ来て面白さを見つけたら、草野球を休んででも来てくれる。先ほどの話のように、自分の好きなところから本に入るとするのはとても大事だと思う。虫の好きな子なら昆虫図鑑を絶対読むし、野球好きなら野球の本を絶対読む。それがきっかけ作りだと思っている。今回のボランティアに関して資料を見ると、活動の経験年数2年～5年の方が多い。多分、長い間やってきた人は少し疲れて、そろそろ面白くなくなっているのだと思う。面白ければ、多少の困難があっても来る。これは実績がある。だんだん慣れてきて、面白くないから来

なくなるのだろう。一方で、この2年~5年が多いということは、人材不足と言いながら、実は新規の人が入っているということ。「協働」ではなく「融合」という言葉を使い、学校からしてほしいことを言うてもらっただけではなく「一緒に何か面白いことをしよう」という話を、学校の先生や、校長室へ行ってする。その話の中から出てくることを、コーディネートする。学校から言われることの中にはやりにくいことがあるのも事実だが、そういったことも踏まえながら、資料の「自分への影響で感じたこと」にあるように、1番2番3番のところを楽しかったと思ってきている人が多いということは、ここを十分に使っていかねばならない。学校では子どもたちと地域の人が遊び、先生方の「ちゃんと地域の方に声かけや」という子どもへの指導の一言で、地域の方々はとても喜ぶ。今まで、地域の何百人という人に来てもらったが、地域の方にとっては、「この前、道で会った子が『そうめんのおっちゃんや』って言うてくれた」というようなことが、一番の喜びになる。そういうことを言ってくれた方は、絶対次も来てくれる。しかし、ちょっとした失敗をして面白くなくなったら、その方は来なくなる。そうすると、人材不足と思うかもしれない。しかし、実際はこの二、三年の間、若い人も増えている。これが本当に人材不足といえるのかはわからない。いずれにせよ社会教育というのは面白い面白くないかだけだと思う。それを全面的に出して、もっと「おもしろいこと」をやっていくべき。そして、この教育コミュニティづくりが始まって、コーディネーターができたのが平成13年から。その2年後ぐらいから、社会福祉協議会が、一定の予算を取っている。教育コミュニティは予算が全然なく、コーディネーターもずっとボランティアでやっていたが、地元の社会福祉協議会に聞くと、子育て支援や世代間交流などで、年間30万の予算があるというのを聞き、それから一緒に活動していることがたくさんある。しかし、民生委員、地区福祉委員、校区福祉委員の方などがだんだん面白くなくなって、規模縮小するというのが現実。世代間交流の予算等も含めて予算はあるはず。どれだけ面白いことをさせてもらうかということに限るので、地域だけではなく、学校とか図書館とかいろんな人と面白いことをやっていかなければならない。あんまり本を読みたくない子のことを考えると、何か根本的な面白さというのがないのではという、寂しさを感じている。

- 委員 確認として、別紙2のコーディネーターおよびボランティア対象アンケートについて、コーディネーターとボランティアに同じアンケートを実施しているのか。
- 事務局 そのとおり。
- 委員 コーディネーターとボランティアを分けるということはしていないのか。
- 事務局 していない。コーディネーターの方だけよりも、もっと広くデータ欲しかったので、一緒にお答えをしていただいた。
- 委員 コーディネーターという、役割での区別はあるのか。
- 事務局 ある。
- 委員 おそらく10年、15年続けられているコーディネーターの意識からすると、自分が長くやっていて、後進がなかなか育たないという意見が出てくることはあるのではない

か。しかし、そういった中でも先ほども言ったように、一本釣りで育てていく、バトンタッチしていくということが行われているのだろうと思う。おっしゃられたように、元々は学校のために何かしましょうという学校支援から始まり、今は学校と協働しましょうということになっている中で、やはり地域住民の方からすると、やりがいやおもしろさが必要だということ。しんどいことをボランティアとして続けてくださいというのは、なかなか難しい。そういうところは考えていく必要がある。子どもから一枚、「おじちゃんありがとう」という手紙が来るだけでも、本当に効果がある。それと同じように、学校の先生もボランティアさんとかコーディネーターさんにきちんと挨拶することが大切。「この人、うちの学校に何しに来とんや」みたいな目で見られて、ボランティアさんがげんなりするというのはよくある話で、ボランティアの方に気持ちよく活動していただくということが重要。そして、府としてできることは、その横の繋がりを作っていくような取組み。講習で5回連続のものも企画されていたようだが、市町村で活動されている方の養成講座のような形式で、お互いの活動内容や情報交換をする機会を作ることは非常に大切。先ほどの委員の言葉に尽きるが、社会福祉協議会とうまく連携しながら、面白いことを探して活動を進めていく中で、学校と地域の方がウィンウィンの関係となるよう、学校のためにもなり、やってみても楽しいというものを見つけ出していくことが大切なのだろう。

◆その他(1)近畿地区社会教育研究大会(大阪大会)について

○委員 定員のこともあるので市町村から、私は大阪府で申し込むように言われているが、よいか。

○事務局 問題ない。

◆その他(2)大阪府視覚障がい者等の読書環境の整備の推進に関する計画(読書バリアフリー計画)について

○委員 最近、YouTubeに著作権の切れた本を朗読してくださっている人たちがたくさんいる。スマホ等はタッチパネルなので、目に障がいがある方がそれを探せないこともあるので、目次を音声化するなど、アクセスできるような方法があればよいと感じている。

○事務局 点字図書館の方に伺ったところ、今おっしゃられたような、スマホでタッチしたところを読み上げてくれるソフトなどがあると聞いている。そういったものを活用しているらしい全盲の方もおられた。一方、そういったアプリがあることを知らない方や、知っていても操作方法がわからない方もいる。そのほかにも、高齢の方などにとっては、そういった機械を敬遠されるということも課題として伺っている。委員の言われたことも含めて、わかりやすくお伝えできるような取組みができればよいと考えているところ。